

希麟『續一切經音義』反切小考

大竹昌巳

一

遼の五京の一つに数えられ、南京析津府と稱された幽州(燕京)は、遼領内における漢族文化の中心地として榮え、金代には中都、元代には大都、さらに明清代および現代中國においては北京と呼ばれて首都機能を擔う存在へと變貌していった。それに伴い、當地の漢語方言も北方漢語圏において主導的な役割を獲得するに至った。遼代漢語音の解明は、このような近世北方漢語の展開、特にその黎明期を理解する上で重要な意味を有するものである。

ところで、ある時代・ある地域の言語音を同時代資料によって知ろうとするとき、そうした資料には大別して2つのタイプが存在する。1つは他言語の話者が、自言語を通して當該言語音を記録したもの、或いは逆に當該言語の話者が自言語を通して他の言語音を記録したものであり、もう1つは當該言語の話者自身がその音韻を内省し記録したものである。前者は主として對音資料であり、後者の資料としては音註や音圖の類いがある。各々から得られる情報はその種類や質において大いに異なるため、それらをバランスよく斟酌商量してこそ質の高い音韻體系の再構が可能となる。

遼代漢語音の研究は、近年、契丹語資料が利用可能となったことで劇的に進展した。しかしながら、こうした對音資料を用いた研究にはある部分においては限界もあり、より精確な音韻體系の再構を望むには今述べた後者の資料が必要になってくる。

現代に傳わる数少ない遼人の著作に、希麟『續一切經音義』と行均『龍龕手鏡』がある。兩書には数多くの音註が含まれており、これらが遼代漢語音に基づくものであれば、その再構の極めて有力な資料となる。果たして、これらの音註はそうした資料と看做することができるだろうか。

本稿は、このうち希麟『續一切經音義』音註が遼代音再構に有用であるか否かを検討するものである。

二

希麟集『續一切經音義』10卷(以下、『希麟音義』)は、慧琳撰『一切經音義』100卷

(783-807年撰述。以下、『慧琳音義』)の續編として、同書未收の佛教典籍に含まれる難語を逐次取り上げて音註・義註・字體註を施した隨函形式の音義書である¹⁾。高麗大藏經に收められて今に傳わる²⁾。卷首の署名に據れば、編者希麟は燕京崇仁寺の僧侶である。卷5の記述から、同卷纂述時點で統和5年(987)であったことが知られる(神尾1937: 80f)。

以下に『希麟音義』註文の一例を示す(原文の細字註は〈 〉で括って示す)³⁾。

- (1) 鸚鵡〈上, 烏耕反。下, 音武。下又作「鵑」, 同。『山海經』云: 黃山有鳥, 青羽赤喙, 人舌能作人語, 名曰鸚鵡。『曲禮』曰: 鸚鵡, 能言不離飛鳥。〉

〔『希麟音義』卷4「『大乘本生心地觀經』卷第一」(四02)〕

上文に見られるような「鸚」字に對する反切「烏耕反」や「鵑」字に對する直音「武」が『希麟音義』音註の主體である。

坂井(1955)はこうした『希麟音義』音註を宋代(遼代)北方音を反映する資料として分析しているが、そもそも同書音註がそうした資料と看做しうるのかという根本的な問題を検討していない。少なくとも義註に關する限り先行諸書の引用を旨とする『希麟音義』の纂述態度から見て、音註に關してもやはり先行書の襲用ではないかということは當然疑ってみなければならない。例えば上に挙げた註文は、明示はされていないが『慧琳音義』からの引用であるのが明白であり、そこに含まれる音註を直接遼代音を反映するものと看做すことはできない。

- (2) 鸚鵡〈上, 烏耕反。下, 音武。或作「鵑」, 二體同。『山海經』云: 黃山有鳥, 青羽赤喙, 人舌能作人語, 名曰鸚鵡。『曲禮』曰: 鸚鵡能言不離飛鳥是也。〉

〔『慧琳音義』卷4「『大般若波羅蜜多經』卷第三百九十八」(○四23)〕

切通(2004)に據れば、『希麟音義』音註3429例(典據を明示する音註等を除く)のうち、『慧琳音義』と用字が一致するもの1252例(36.5%), 陳彭年等撰『大宋重修廣韻』(1008年成書。以下, 宋本『廣韻』)と一致するもの1743例(50.8%)であり, 重複を除いた2458例(71.7%)が『慧琳音義』または宋本『廣韻』の用字と一致する

1) ただし、『希麟音義』卷1が註解對象とする『大乘理趣六波羅蜜多經』(788年般若譯)は『慧琳音義』卷41ですでに註解對象として扱われており, 重複している。
2) 契丹大藏經に收められたものが高麗に傳わったものと考えられる(高田2010: 12f)。そのほか, 刊本殘簡一葉がカラホトから發見されている(聶鴻音2001)。
3) 以下、『希麟音義』および『慧琳音義』は高麗藏本(K.1497/K.1498)に依據する。

という。この一致率の高さは、希麟が註音に際して『慧琳音義』や切韻系韻書を参照したことを物語っている。ただ、切通（2004）はこれら『慧琳音義』や宋本『廣韻』と一致する音註その他を除いて残る 824 例（24.0%）を希麟自身の音註と判断しているが、この点については大いに再考の餘地がある。

第一に、希麟が参照したとみられる書籍が他にもあるにも関わらず、切通（2004）は『慧琳音義』・宋本『廣韻』の 2 書と比較するのみで、残りの反切を全て希麟自身の反切に歸してしまっている。

第二に、切通（2004）自身も認めるように、宋本『廣韻』は『希麟音義』以後の成立であって、希麟が参照したのは宋本『廣韻』そのものではありえない。切通（2004）が宋本『廣韻』のみを参照してそれ以前の切韻諸本、特に五代から遼宋代にかけての時期に通行していた孫愐『唐韻』系統の韻書に關わる諸本の反切を考慮に入れなかったのは片手落ちと言わざるを得ない。

第三に、切通（2004）が希麟自身の音註と判断し、近世北方音の特徴を表わすとして挙げている例を検討してみると、極めて多くの疎漏・過誤があり、実際には切韻系韻書や『慧琳音義』に依據しているとみるべき用字が数多くある⁴⁾。

以上の点から、切通（2004）のデータは信頼性に缺ける。そこで、『希麟音義』音註の典據については改めて調査する必要がある。

三

後述するように希麟は「切韻」と「孫^{フツ}緬廣韻」（單に「廣韻」「孫緬」とも）という 2 種類の切韻系韻書を利用している。『希麟音義』において前者は 600 回以上言及されるのに對して後者への言及は十數回に留まるが、前者には『慧琳音義』等の先行書からの孫引きも多く含まれ、「切韻」の名の下に複数の edition の『切韻』が指されていると考えられるために、その性格を一概に論ずることはできない。一方、「孫緬廣韻」はその名から見て孫愐『唐韻』系統の一本であり、ここから希麟が少なくとも孫愐『唐

4) 一例を挙げれば、『希麟音義』「縛撲」項〔五 18〕に「下，蒲角反。」（「蒲」は全濁音）とあるのに關して、「撲」字は宋本『廣韻』では〈普木切〉（「普」は次清音）だから、清聲母と濁聲母の混同を示す例だと切通（2004）は解釋しているが、宋本『廣韻』入聲覺韻・霽小韻（蒲角切）に「撲〈相撲。亦作「撲」。〉」とあるのを見逃している。蔣本『唐韻』入聲覺韻・霽小韻（蒲角反）も「撲〈相ッ。〉」を収めており、却って入聲屋韻・朴小韻（普木反）には「撲」字を収めない。従って、これは清濁混同を示す例に当たらないどころか、反切用字が宋本『廣韻』等と一致するため切韻系韻書に依據していることが明らかな例である。切通（2004）にはこうした見落としや誤解がかなりあることに注意が必要である。

韻』系統の韻書を参照したことは明らかである⁵⁾。そこで、以下ではまず『希麟音義』の中に『慧琳音義』と孫愐『唐韻』系韻書を典拠とする音註がいかほど含まれているかを調査しよう。

5) 孫愐『唐韻』5巻は〔隋〕陸法言『切韻』5巻(601年成書)の増補改訂版の一つで、その一本をさらに増補改訂したのが宋本『廣韻』5巻である。孫愐『唐韻』は他にも「孫愐切韻」(源順『倭名類聚抄』等)や「廣切韻」(『慧琳音義』)、「孫愐廣韻」(〔南宋〕志磐『佛祖統紀』)など様々に呼ばれたが、實際、孫愐『唐韻』の中にも様々な異本が存在した。

平安前期の菅原是善『東宮切韻』(佚書)が引く「孫愐」は唐開元21年(733)の初撰本であり(上田1956:88f)〔清〕卞永譽『式古堂書畫彙考』卷8にはその初撰本の序文と各巻の韻目數・丁數が引かれている(王國維1927)。また天寶10載(751)の序文を有する重定本が知られ、これには「論曰」で始まる文章が附隨するものとしめないものがある。論のある序文は宋本『廣韻』巻頭に収められており、敦煌出土寫本P.2638紙背(表は後唐清泰3年(936)の牒狀)にも同文がある。一方で、論のない天寶十載孫愐序を有する寫本(刻本缺損部の補寫)も敦煌から出土しているが(P.2016表)、これは宋本『廣韻』の藍本となった系統の孫愐『唐韻』とは著しく體裁の異なるものであり、書名も「切韻」となっている(上田1973:24-33,41,42f,62-64)。

現傳する最大の『唐韻』寫本である蔣斧舊藏唐寫本『唐韻』殘卷(以下、蔣本『唐韻』)は、卷4「去聲五十九韻」のうち「八 未韻」後半から「十九 代韻」末尾近くまでと「廿五 願韻」末尾近くから卷末まで、さらに卷5「入聲卅四韻」の全葉を残す。同寫本は闕筆の狀況から唐肅宗・代宗間(在位756-762・762-779)の寫本とされ(王國維1923)、また『東宮切韻』所引の初撰本佚文とはかなり異同が見られること(中村1991:165)、韻目數も『書畫彙考』の記載とは異なることから、開元初撰本ではありえず、天寶重定本の系統に屬する最初期の寫本と看做すのが妥當である。

『希麟音義』の引く「孫愐廣韻」や〔後晉〕可洪『新集藏經音義隨函錄』(940年成書。『可洪音義』)の引く「孫愐韻」は總じて蔣本『唐韻』よりも宋本『廣韻』に近い(徐時儀2002, 徐朝東2012:229-238)ので、五代~遼宋代に通行し、宋本『廣韻』の藍本となった孫愐『唐韻』は天寶重定本にさらに改訂が加わったものと考えなければならない。天寶十載孫愐序の後ろに論が附隨するのは天寶重定本にさらに後人の手が加わっていることの證しである。〔南宋〕張昞『雲谷雜記』卷2は「唐天寶中、孫愐因隋陸法言『切韻』作『唐韻』五卷。後又有『廣唐韻』五卷、不知撰人名氏。……景德中〔1004-07〕、又詔陳彭年以『廣唐韻』等重行校定、大中祥符元年〔1008〕改爲『大宋重修廣韻』。」と記し、宋本『廣韻』が藍本としたのが孫愐『唐韻』ではなく著者不明の『廣唐韻』なる書であったとしている。上述の「孫愐廣韻」や「孫愐韻」など五代~遼宋代に通行していた孫愐『唐韻』系統の韻書はこの『廣唐韻』と同種の韻書であろう。後人の手が加わっても原著者の名を冠して呼ぶことは珍しいことではない。

ところで、〔北宋〕徐鉉校定『說文解字』(986年成書、いわゆる「大徐本」)の序文には「『說文』之時、未有反切、後人附益、互有異同。孫愐『唐韻』行之已久、今竝以孫愐音切爲定。」とあって、當時の『說文解字』に附されていた反切に異同があるのをすべて孫愐『唐韻』の反切によって正したという。大徐本『說文』の反切を實際に見てみると、切韻系韻書の同一小韻所屬字に對して異なる反切が附されていることが多々あるため、大徐本の全反切を孫愐『唐韻』に由來すると看做すことはできないが(舊來の反切が修正されずに残ったものか)、切韻諸本の反切と比較することでどの反切が孫愐『唐韻』に由來するかはほとんどの場合に見當を付けることができる。この大徐本が依據した孫愐『唐韻』には蔣本『唐韻』になく宋本『廣韻』にある増加小韻が存したと考えられる(徐朝東2012:124-136)ので、大徐本所據『唐韻』も天寶以後再重定本の系統に屬することが分かる。従って、五代~遼宋代に通行していた孫愐『唐韻』系韻書の反切を知る上で大徐本『說文』反切も有力な資料となる。

しかし、そうは言っても、3000例を超える音註すべてを検討するには膨大な時間を要する。そこで、ここでは試みに切韻系韻書の去聲未韻から代韻までの各韻（未・御・遇・暮・泰・霽・祭・卦・怪・夬・隊・代の諸韻）の所屬字に対する反切 211 例のみについて検討を加える⁶⁾。

以下はその手順と結果である。まず、調査範囲の『希麟音義』反切について『慧琳音義』からの引用か否かを検討し、引用と判断された場合には以下各表の「推定される典拠」欄に「慧琳」と記して〔 〕内に高麗藏本での卷丁数を示した（卷数を漢數字、丁数をアラビア數字で示す）⁷⁾。

次に、『慧琳音義』からの引用と判断された反切を除いた残りの反切について、孫愐『唐韻』系韻書からの引用と看做しうるか否かを検討した。具体的には、蔣本『唐韻』反切、大徐本『說文解字』反切のうち孫愐『唐韻』に由来すると推定される反切、宋本『廣韻』反切の3種のいずれかと一致するものを孫愐『唐韻』系韻書からの引用と看做し、「推定される典拠」欄に「孫愐」と記した。

兩調査を経て『慧琳音義』とも孫愐『唐韻』系韻書とも用字が一致しないと判断された残りの反切には、「推定される典拠」欄に☆または★を記した（兩記號の意味については後で述べる）。

-
- 6) この範囲を選んだことについては蔣本『唐韻』の殘卷部分に当たること以外に特別な意圖はないことを豫め断っておく。検索には上田（1986）を利用したが、氣付いた限り2例の脱漏があったため補った。また、『希麟音義』原文の「□，○○反。……△，音同上。」のような記載について、上田（1986）は□字の反切として〈○○反〉を採録するのみならず、△字の反切としても〈○○反〉を採録するが、本調査では後者のような例は対象外とした。
- 7) 『慧琳音義』からの引用か否かを判断する基準は、單に反切用字が一致するか否かだけでなく、反切を含む註文全體が相似しているか否かに置いた。註文が『慧琳音義』とやや異なる場合には「？」を附した。

【未韻】		『希麟音義』		孫愐『唐韻』諸本反切 ⁸⁾			推定される典拠
#	字	反切	卷丁	蔣本	大徐本	宋本	
001	誹	非味	六 09	(缺)	*方未	方味	慧琳〔〇二 32〕
002	〃	方未	九 03	〃	〃	〃	孫愐
003	癩	〃	九 18	〃	〃	〃	孫愐
004	ㄗ	肥味	一 10	(扶沸)	*扶沸	(扶涕)	慧琳〔〇二 04〕
005	漑	基懿	三 18	(居未)	*居未	居家	慧琳〔〇七 05〕
006	歛	許既	九 04	許既	*許既	許既	孫愐
007	卉	輝貴	三 13	(缺)	*許貴	許貴	慧琳〔〇八 21 ほか〕?
008	〃	許貴	四 10	〃	〃	〃	孫愐
009	緯	云貴	二 15	(缺)	*云貴	于貴	孫愐
010	脍	韋畏	二 16	〃	〃	〃	慧琳〔〇五 04〕

【御韻】		『希麟音義』		孫愐『唐韻』諸本反切			推定される典拠
#	字	反切	卷丁	蔣本	大徐本	宋本	
011	著	張慮	五 03	<u>所慮</u>	*陟慮	陟慮	慧琳〔一〇 20〕
012	瀘	廬著	五 20	(良據)	*良據	(良倨)	慧琳〔六二 31〕

8) 蔣本『唐韻』(「蔣本」と略する)欄に關して、「(缺)」とあるのは當該字を含む小韻の反切(或いは當該小韻全體)が缺損部に当たり不明なものを指す。反切上下字の一方のみを缺する場合はその部分を「□」で示す。

蔣本および宋本『廣韻』(「宋本」と略する)欄に關して、反切に()を附したものは、當該小韻自體は存在するが、その小韻に當該字を收めないことを意味する。例えば、004「ㄗ」〈肥味反〉について、その反切が示す小韻は蔣本では〈扶沸反〉の反切を附されて存在し、宋本では〈扶涕切〉(「涕」は「沸」の誤)の反切を附されて存在するが、兩書のその小韻に「ㄗ」字そのものは含まれていない。またこれらの欄について、下線を引いた字は明らかかな誤字である。

大徐本『說文解字』(「大徐本」と略する)欄に關しては、ここに示したのは當該音節を表わすに適した同書反切のうち、孫愐『唐韻』由來と推定されるものであり、大徐本で實際に當該字に附されている反切と一致するとは限らないことに注意されたい。例えば、大徐本で001「誹」字に實際に附されている反切は上聲尾韻の音を示す〈敷尾切〉のみで、問題にしている去聲未韻の音ではないため、このような場合には同音字から適切な反切(この場合は「沸」字に附された〈方未切〉)を探してきて提示している。同様に、大徐本では183「械」字に〈胡戒切〉とあるが、同音の「斷閑濯衿」4字には〈胡介切〉とあり、こちらが孫愐『唐韻』に由來する反切と推定されるため、後者を取って示してある。また、194「話」字には〈胡快切〉とあるが、蔣本・宋本を含む切韻諸本の反切が全て〈下快反[切]〉であることから、大徐本の〈胡快切〉が孫愐『唐韻』に由來するとは考えがたい。しかし「話」字には他に同音字がないため、大徐本が参照した孫愐『唐韻』で當該小韻の反切が何であったのかは知りえない。このように大徐本が依據した孫愐『唐韻』の反切が不明な場合には「？」で示した。

なお、大徐本は靜嘉堂文庫藏宋刊本(四部叢刊所收)、宋本『廣韻』は澤存堂本に據る。

013	詛	側據	三 18	莊助	*莊助	莊助	慧琳〔二七 63〕
014	〃	〃	六 14	〃	〃	〃	慧琳〔二七 63〕
015	〃	〃	六 22	〃	〃	〃	慧琳〔二七 63〕
016	曙	常恕	九 07	常恕	*常恕	常恕	孫愐
017	踞	居御	七 03	居御	*居御	居御	慧琳〔四二 15〕
018	遽	其倨	二 07	其倨	*其倨	其據	孫愐
019	〃	〃	九 04	〃	〃	〃	孫愐
020	〃	渠預	三 19	〃	〃	〃	慧琳〔二三 18, 23〕
021	馭	牛倨	七 05	牛據	*牛據	牛倨	☆ ⁹⁾
022	〃	牛據	九 07	〃	〃	〃	孫愐
023	〃	〃	九 15	〃	〃	〃	孫愐
024	瘀	於據	三 10	衣倨	*依倨	依倨	慧琳〔六二 20〕
025	淤	依倨	五 22	〃	〃	〃	孫愐
026	豫	羊恕	三 15	羊洳	*羊茹	羊洳	☆
027	〃	餘據	五 24	〃	〃	〃	慧琳〔〇三 05〕
028	〃	羊茹	八 15	〃	〃	〃	☆ ¹⁰⁾
029	〃	羊洳	九 10	〃	〃	〃	孫愐
030	輿	余據	八 14	〃	〃	〃	慧琳〔二七 13〕

【遇韻】		『希麟音義』		孫愐『唐韻』諸本反切			推定される典據
#	字	反切	卷丁	蔣本	大徐本	宋本	
031	仆	芳遇	一 11	<u>方</u> 遇	*芳遇	芳遇	孫愐
032	附	符遇	八 08	符遇	*符遇	符遇	孫愐
033	駙	〃	九 12	〃	〃	〃	孫愐
034	務	亡遇	三 19	亡遇	*亡遇	亡遇	孫愐
035	、	竹句	三 02	(中句)	*中句	(中句)	☆ ¹¹⁾
036	豈	〃	五 03	中句	〃	中句	慧琳〔一〇 20〕

9) 宋本〈牛倨切〉と一致するものの、蔣本〈牛據反〉、大徐本〈牛據切〉であり、『希麟音義』に〈牛據反〉とする箇所もあってこちらを孫愐『唐韻』からの引用と判断したため、必然的にこの〈牛倨反〉は孫愐『唐韻』からの引用ではないと考えることになる。

10) 大徐本〈羊茹切〉と一致するものの、蔣本〈羊洳反〉、宋本〈羊洳切〉であり、『希麟音義』に〈羊洳反〉とする箇所もあってこちらを孫愐『唐韻』からの引用と判断したため、必然的にこの〈羊茹反〉は孫愐『唐韻』からの引用ではないと考えることになる。

11) 「、」字は宋本〈知庾切〉(上聲麌韻)。去聲の音は諸書にも見えない。

037	壹	竹句	十 05	中句	*中句	中句	★
038	夔	力句	七 04	(良遇)	?	(良遇)	慧琳〔四二 16〕
039	屢	良遇	十 16	良遇	〃	良遇	孫愐
040	娶	七句	九 02	七句	*七句	七句	孫愐
041	聚	疾喻	二 04	才句	*才句	才句	慧琳〔二一 30〕
042	霍	之戍	二 07	(之戍)	*之戍	之戍	孫愐
043	鼻	之句	二 14	之戍	〃	〃	★
044	〃	之戍	七 05	〃	〃	〃	孫愐
045	炷	朱遇	三 13	〃	〃	〃	☆
046	澍	朱戍	五 08	〃	〃	〃	慧琳〔一〇 26〕
047	〃	朱樹	六 05	〃	〃	〃	慧琳〔三八 13〕
048	戍	式句	四 02	(缺)	*傷遇	傷遇	☆
049	寓	牛具	十 02	牛具	*牛具	牛具	孫愐
050	羽	王句	十 04	王遇	*王遇	王遇	★

【暮韻】		『希麟音義』		孫愐『唐韻』諸本反切			推定される典據
#	字	反切	卷丁	蔣本	大徐本	宋本	
051	哺	蒲慕	一 15	薄故	*薄故	薄故	慧琳〔四一 37〕 ¹²⁾
052	捕	蒲故	二 08	〃	〃	〃	★
053	〃	薄故	四 16	〃	〃	〃	孫愐
054	度	徒故	五 07	徒故	*徒故	徒故	孫愐
055	怒	乃故	三 14	奴故	*乃故	乃故	孫愐
056	〃	〃	六 21	〃	〃	〃	孫愐
057	路	盧故	二 13	洛故	*洛故	洛故	☆
058	〃	洛故	四 01	〃	〃	〃	孫愐
059	輅	〃	五 03	〃	〃	〃	孫愐
060	〃	〃	五 23	〃	〃	〃	孫愐
061	〃	〃	六 17	〃	〃	〃	孫愐
062	〃	〃	八 06	〃	〃	〃	孫愐

12) 『希麟音義』の〈蒲慕反〉に對して『慧琳音義』當該箇所は〈蒲暮反〉に作るが、註1で觸れたように『希麟音義』卷1は『慧琳音義』卷41と同一の經典を註解對象とし、『慧琳音義』で既註の語についてはほぼその註文を襲用するので、兩者の反切用字の食い違いはいずれかの誤寫・誤刻によって生じたものと考えられる。なお、『慧琳音義』の別の箇所では當該字の反切を〈蒲慕反〉に作るものもあるが、註文は卷41が最もよく一致する。

063	輅	洛故	八 08	洛故	*洛故	洛故	孫愐
064	〃	〃	九 07	〃	〃	〃	孫愐
065	〃	〃	九 13	〃	〃	〃	孫愐
066	露	〃	八 16	〃	〃	〃	孫愐
067	塑	桑故	五 17	(桑故)	*桑故	桑故	孫愐
068	固	古誤	六 18	古暮	*古暮	古暮	☆
069	寤	五故	一 16	五故	*五故	五故	慧琳 [四一 40]
070	〃	吾故	三 02	〃	〃	〃	慧琳 [〇五 02]
071	〃	〃	三 19	〃	〃	〃	慧琳 [七七 37] ?
072	〃	〃	九 07	〃	〃	〃	慧琳 [七七 37] ?
073	誤	五故	九 10	〃	〃	〃	孫愐
074	護	胡故	十 14	胡誤	*胡誤	胡誤	★
075	惡	烏故	九 14	烏故	*烏故	烏路	孫愐

【泰韻】		『希麟音義』		孫愐『唐韻』諸本反切			推定される典據
#	字	反切	卷丁	蔣本	大徐本	宋本	
076	貝	博蓋	三 15	(缺)	*博蓋	博蓋	孫愐
077	霈	普蓋	三 12	普蓋	*普蓋	普蓋	孫愐
078	〃	〃	九 09	〃	〃	〃	孫愐
079	蛻	湯外	五 11	他外	*他外	他外	慧琳 [五六 46]
080	大	徒蓋	一 04	(缺)	*徒蓋	徒蓋	孫愐
081	籟	落大	一 04	□蓋	*洛帶	落蓋	☆
082	〃	洛大	五 04	〃	〃	〃	☆
083	瀨	落大	三 16	〃	〃	〃	☆
084	癩	來大	六 10	〃	〃	〃	慧琳 [〇二 26]
085	厲	來大	六 10	(□蓋)	〃	(落蓋)	慧琳 [〇二 26]
086	勾	垓礙	一 13	古太	*古太	古太	慧琳 [四一 29]
087	〃	垓艾	三 07	〃	〃	〃	慧琳 [六〇 13]
088	蓋	古太	六 08	〃	〃	〃	孫愐
089	膾	瓌外	一 14	古外	*古外	古外	慧琳 [〇一 33]
090	〃	〃	四 09	〃	〃	〃	慧琳 [〇一 33]
091	〃	〃	六 09	〃	〃	〃	慧琳 [〇一 33]
092	〃	古外	四 15	〃	〃	〃	慧琳 [二七 55]

093	𠂔	古外	二 07	(古外)	*古外	古外	慧琳〔〇三 20〕
094	檜	苦會	五 11	苦會	*苦會	苦會	孫愐
095	𦉳	五會	九 11	(五會)	*五會	(五會)	孫愐? ¹³⁾
096	害	戶艾	九 08	(缺)	*胡蓋	胡蓋	☆
097	薈	烏外	三 20	烏外	*烏外	烏外	慧琳〔二七 43〕
098	〃	〃	九 07	〃	〃	〃	慧琳〔二七 43〕

【霽韻】 ¹⁴⁾ 『希麟音義』				孫愐『唐韻』諸本反切			推定される典據
#	字	反切	卷丁	蔣本	大徐本	宋本	
099	媿	疋閉	三 04	匹詣	?	匹詣	慧琳〔八八 05〕?
100	〃	〃	十 06	〃	〃	〃	慧琳〔八八 05〕
101	薜	聲閉	一 14	蒲計	*蒲計	蒲計	慧琳〔三三 41〕
102	〃	蒲計	四 02	〃	〃	〃	孫愐
103	〃	〃	八 03	〃	〃	〃	孫愐
104	〃	〃	八 15	〃	〃	〃	孫愐
105	〃	〃	九 03	〃	〃	〃	孫愐
106	〃	〃	九 13	〃	〃	〃	孫愐
107	〃	〃	九 15	〃	〃	〃	孫愐
108	〃	〃	十 12	〃	〃	〃	孫愐
109	〃	毗桂	八 09	〃	〃	〃	慧琳〔二九 08〕
110	諦	都計	四 09	訐計	*都計	都計	孫愐
111	洩	他計	四 07	他計	*他計	他計	孫愐
112	〃	〃	六 04	〃	〃	〃	孫愐
113	〃	〃	九 04	〃	〃	〃	孫愐
114	遞	特計	二 19	特計	*特計	特計	孫愐
115	荔	黎帝	一 14	郎計	*郎計	郎計	慧琳〔三三 41〕
116	戾	郎計	三 10	〃	〃	〃	孫愐
117	〃	〃	八 04	〃	〃	〃	孫愐

13) 當該字(『根本說一切有部毗奈耶破僧事』卷12に「𦉳甥」として見える)は『集韻』や『龍龕手鏡』にも未收。「外」字の反切に據ったか。

14) 「𦉳」字(宋本〈烏結切〉,入聲屑韻)に對して〈煙繼反〉(「繼」は霽韻字)と註音した箇所がある(「螟蛉」項〔一 12〕)が、當該箇所は『慧琳音義』「螟蛉」項〔四一 27〕の襲用であり、同箇所では〈煙結反〉に作るから、「繼」は明らかに「結」の誤字である。従って、これは霽韻ではなく屑韻の例として扱うべきものであるから本表には含めない。

118	儷	郎計	三 20	郎計	*郎計	郎計	孫愐
119	〃	〃	九 10	〃	〃	〃	孫愐
120	唳	〃	四 11	〃	〃	〃	孫愐
121	濟	子計	四 19	子計	*子計	子計	孫愐
122	劑	在詣	五 16	在詣	*在詣	在詣	孫愐
123	壻	蘇計	九 02	蘇計	*蘇計	蘇計	孫愐
124	繼	古詣	三 09	古詣	*古詣	古詣	孫愐
125	繫	〃	三 20	〃	〃	〃	孫愐
126	系	胡計	十 08	胡計	*胡計	胡計	孫愐
127	翳	於計	二 01	於計	*於計	於計	孫愐
128	腎	〃	二 04	〃	〃	〃	孫愐
129	〃	〃	三 04	〃	〃	〃	孫愐
130	〃	〃	三 18	〃	〃	〃	慧琳〔〇二 26〕
131	〃	〃	六 13	〃	〃	〃	孫愐

#	【祭韻】 字	『希麟音義』		孫愐『唐韻』諸本反切			推定される典據
		反切	卷丁	蔣本	大徐本	宋本	
132	蔽	卑袂	一 20	必袂	*必袂	必袂	慧琳〔四一 49〕
133	〃	〃	二 08	〃	〃	〃	慧琳〔〇四 22〕
134	袂	弥勵	二 16	弥弊	*彌弊	彌弊	慧琳〔二三 25〕
135	綴	追衛	五 04	陟衛	*陟衛	陟衛	慧琳〔一〇 22〕
136	勵	力制	三 17	力制	*力制	力制	孫愐
137	礪	〃	十 07	〃	〃	〃	孫愐
138	祭	子例	二 14	子例	*子例	子例	孫愐
139	〃	〃	四 19	〃	〃	〃	孫愐
140	〃	〃	八 14	〃	〃	〃	孫愐
141	〃	〃	九 06	〃	〃	〃	孫愐
142	際	〃	三 03	〃	〃	〃	孫愐
143	脛	詮歲	六 15	(缺)	*此芮	此芮	慧琳〔〇三 32〕
144	歲	相銳	九 10	相銳	*相銳	相銳	孫愐
145	彗	隨銳	五 07	祥歲	*祥歲	祥歲	慧琳〔二九 39〕
146	簪	囚歲	八 17	〃	〃	〃	★

147	贅	佳芮	一 16	之芮	*之芮	之芮	慧琳〔四一 39〕 ¹⁵⁾
148	〃	〃	二 06	〃	〃	〃	慧琳〔四一 39〕
149	掣	昌制	五 12	尺制	*尺制	尺制	慧琳〔〇二 07 ほか〕？
150	〃	〃	七 16	〃	〃	〃	孫愐 ¹⁶⁾
151	〃	昌世	六 15	〃	〃	〃	★
152	〃	〃	六 16	〃	〃	〃	★
153	蛻	舒芮	五 11	舒芮	*輸芮	舒芮	孫愐
154	噬	時制	三 09	時制	*時制	時制	孫愐
155	筮	〃	四 17	〃	〃	〃	孫愐
156	誓	〃	十 01	〃	〃	〃	孫愐
157	蚘	而稅	三 16	而銳	*而銳	而銳	慧琳〔〇九 27〕
158	屬	居又	一 04	居例	*居例	居例	慧琳〔四一 03〕
159	藝	魚祭	五 05	魚祭	*魚祭	魚祭	孫愐
160	〃	〃	八 07	〃	〃	〃	孫愐
161	嚙	〃	九 06	〃	〃	〃	孫愐
162	曳	餘世	六 15	餘制	*餘制	餘制	★
163	叡	悅惠	八 07	以芮	*以芮	以芮	慧琳〔六〇 20〕

【卦韻】		『希麟音義』		孫愐『唐韻』諸本反切			推定される典據
#	字	反切	卷丁	蔣本	大徐本	宋本	
164	斥	普賣	二 17	(匹卦)	*匹卦	匹卦	慧琳〔〇五 03〕
165	杵	疋賣	五 10	〃	〃	〃	★
166	派	疋卦	十 17	匹卦	〃	〃	孫愐
167	賣	莫懈	八 17	莫懈	？	莫懈	孫愐
168	債	側懈	四 19	側賣	*側賣	側賣	☆
169	邈	胡賣	五 14	胡懈	*胡懈	胡懈	☆
170	罍	胡卦	二 07	胡卦	*胡卦	胡卦	孫愐

15) 『慧琳音義』は〈疋芮反〉(「疋」は「莊」の異體字)に作るが、同書のその他の箇所では「贅」字の反切上字に莊母字を用いることがなく全て章母字であること、『希麟音義』の當該註文は『慧琳音義』の註文とほぼ同文であり、その襲用と考えられることから、現行本『慧琳音義』の〈疋芮反〉は〈佳芮反〉の誤寫・誤刻と看做するのが妥当である。實際、『慧琳音義』の別箇所では〈佳芮反〉に作るものも存在する〔〇四 14, 一二 25〕。

16) 『希麟音義』註文は「掣擊〈上, 昌列反。……又音昌制反。〉」とする。一方、蔣本『唐韻』や宋本『廣韻』の入聲薛韻には「掣〈……昌列反 [切]。又昌制反 [切]。〉」とあるので、『希麟音義』の當該反切はこの記述に據ったものと考えられる。

171	隘	鷗介	一 06	烏懈	*烏懈	烏懈	慧琳〔四一 07〕
172	〃	烏懈	五 20	〃	〃	〃	孫愐
173	〃	櫻介	六 10	〃	〃	〃	慧琳〔〇四 14〕

【怪韻】		『希麟音義』		孫愐『唐韻』諸本反切			推定される典據
#	字	反切	卷丁	蔣本	大徐本	宋本	
174	𨮒	排拜	二 16	蒲拜	*蒲拜	蒲拜	慧琳〔二四 37〕
175	〃	蒲拜	九 05	〃	〃	〃	孫愐
176	瘵	齋薤	十 10	側界	*側介	側界	慧琳〔八八 10〕
177	疥	公薤	六 04	古拜	*古拜	古拜	★
178	〃	皆隘	六 10	〃	〃	〃	慧琳〔〇四 14〕
179	怪	古壞	八 04	古壞	*古壞	古壞	孫愐
180	〃	〃	九 08	〃	〃	〃	孫愐
181	喟	口恠	三 18	苦恠	*苦怪	苦怪	慧琳〔三二 13〕？
182	贖	吾恠	五 12	五恠	*五怪	五怪	慧琳〔〇三 15〕
183	械	胡戒	五 06	胡介	*胡介	胡介	☆ ¹⁷⁾
184	〃	〃	八 06	〃	〃	〃	☆
185	壞	懷贖	三 06	胡恠	？	胡怪	慧琳〔〇三 15〕
186	〃	〃	三 13	〃	〃	〃	慧琳〔〇三 15〕
187	〃	〃	五 12	〃	〃	〃	慧琳〔〇三 15〕
188	〃	懷恠	七 12	〃	〃	〃	慧琳〔三七 08〕
189	噫	厄界	十 18	烏界	？	烏界	慧琳〔八九 07〕

【夬韻】		『希麟音義』		孫愐『唐韻』諸本反切			推定される典據
#	字	反切	卷丁	蔣本	大徐本	宋本	
190	敗	蒲邁	九 15	薄□	*薄邁	薄邁	★
191	薑	丑芥	六 07	丑介	*丑芥	丑犗	孫愐
192	犗	古邁	三 09	古喝	？	古喝	★
193	夬	古快	十 12	古邁	*古賣	古賣	慧琳〔八八 11〕
194	話	胡快	八 15	下快	？	下快	★

17) 『慧琳音義』に〈胡戒反〉〔一七 35, 五二 52, 七三 25〕あるも註文が合わない。

【隊韻】		『希麟音義』		孫愐『唐韻』諸本反切			推定される典拠
#	字	反切	卷丁	蔣本	大徐本	宋本	
195	背	補妹	九 04	菴妹	*補妹	補妹	孫愐
196	珮	蒲妹	三 06	(菴妹)	*蒲妹	蒲妹	孫愐
197	〃	〃	七 15	〃	〃	〃	孫愐
198	類	盧對	五 15	盧對	*盧對	盧對	孫愐
199	耒	〃	八 13	〃	〃	〃	孫愐
200	〃	盧會	十 07	〃	〃	〃	慧琳〔八五 02〕
201	誨	荒外	二 06	荒内	*荒内	荒内	★
202	〃	〃	三 20	〃	〃	〃	★
203	殞	胡對	八 12	胡對	*胡對	胡對	孫愐

【代韻】		『希麟音義』		孫愐『唐韻』諸本反切			推定される典拠
#	字	反切	卷丁	蔣本	大徐本	宋本	
204	袋	徒耐	九 05	徒耐	*徒耐	徒耐	孫愐
205	欬	苦槩	六 20	苦概	*苦蓋	苦蓋	★
206	〃	苦戴	七 07	〃	〃	〃	慧琳〔二七 61〕
207	〃	〃	九 17	〃	〃	〃	慧琳〔二七 61〕
208	〃	開蓋	十 18	〃	〃	〃	慧琳〔八九 07〕
209	慨	苦槩	十 01	〃	〃	〃	★
210	礙	五漑	二 07	五槩	*五漑	五漑	孫愐
211	癩 ¹⁸⁾	落代	六 04	(缺)	*洛代	洛代	★

以上の結果を要するに、調査範囲の『希麟音義』反切 211 例のうち、『慧琳音義』に依據したと推定されるもの 73 例 (34.6%)、それを除いた残りの反切のうち孫愐『唐韻』系韻書に依據した可能性のあるもの 103 例 (全體の 48.8%) で、兩者合わせて 83.4% に達する。また、残りの 35 例のうち、以下の 7 例 (上掲の諸表で★で示したものの一部) は誤寫・誤刻が疑われ、やはり孫愐『唐韻』系韻書に據った可能性がある。

18) 『希麟音義』は「疥癩〈……下，落代反。……『説文』作「瘰」。經文作「癩」，俗字也。〉」として「癩」を「瘰」の俗字とするが、切韻系韻書では「癩」は泰韻，「瘰」は代韻に屬す。ここの「落代反」は後者の音を取ったものと判斷し，代韻字として扱う。

#	字	『希麟音義』		孫愐『唐韻』諸本反切			推定される典拠
		反切	卷丁	蔣本	大徐本	宋本	
052	捕	蒲故	二 08	薄故	*薄故	薄故	孫愐？
190	敗	蒲邁	九 15	薄□	*薄邁	薄邁	孫愐？
201	誨	荒外	二 06	荒内	*荒内	荒内	孫愐？
202	”	”	三 20	”	”	”	孫愐？
205	欬	苦槩	六 20	苦概	*苦蓋	苦蓋	孫愐？
209	慨	苦槩	十 01	”	”	”	孫愐？
211	癩	落代	六 04	(缺)	*洛代	洛代	孫愐？

「蒲」と「薄」の誤寫はよくあることで、『希麟音義』の編纂・傳承過程が依據した孫愐『唐韻』系韻書の段階で〈薄故反〉、〈薄邁反〉が〈蒲故反〉、〈蒲邁反〉に誤られたことは十分に考えられる。

「荒」字は反切上字として常用されるものではなく、宋本『廣韻』でも4小韻での使用に留まる。希麟が偶然この字を反切上字に選んだと考えるよりも、孫愐『唐韻』系韻書の反切を襲用したと考える方が遙かに自然であろう。「外」と「内」は運筆次第では見誤る可能性がある¹⁹⁾。

手偏と木偏の區別は寫本においては曖昧で、「概」を「槩」と誤認した上で字體を「槩」に書き換えることもありうるだろう²⁰⁾。

「落」と「洛」の誤寫も十分にありうる²¹⁾。

四

残りの28例について検討しよう。すでに指摘したように、希麟が参照した書籍は

-
- 19) 2箇所とも〈荒外反〉となっていることからすると、『希麟音義』が依據した孫愐『唐韻』の段階ですでに誤っていた蓋然性が大きい。なお、「外」は泰韻、「内」は代韻字である。
- 20) 孫愐『唐韻』はそれ以前の切韻諸本で「愛」字を下字としていた3つの反切すべてを改めており、蔣本では〈五愛反〉〈胡愛反〉が〈五槩反〉〈胡槩反〉となるのに対して〈苦愛反〉のみ〈苦概反〉となっている。他2例から見れば〈苦槩反〉とするテキストが曾て存在したとしても不思議ではない。つまり、蔣本〈苦概反〉の方が誤寫である可能性もある。ただし、930年代成立の源順『倭名類聚抄』(十卷本の巻5、二十卷本の巻13)が引く『唐韻』は代韻字「鎧」の反切を〈苦蓋反〉としており、宋本『廣韻』等と同じく「慨」小韻(溪母代韻)の反切を〈苦蓋反〉とする孫愐『唐韻』系韻書が930年代にすでに存在し(かつ日本にまで流傳し)ていたことにも留意しなければならない。
- 21) 現に『希麟音義』〈湯落反〉[一 12]:『慧琳音義』〈湯洛反〉[四一 28]という誤寫がある(『大乘理趣六波羅蜜多經』巻3中の「驪駝」の上字に対する音註)。

『慧琳音義』と孫愐『唐韻』系韻書に留まらない。『希麟音義』書中には幾種類もの小學書や四部に跨がる廣汎な書籍が引用されている。しかしながら、その多くは『慧琳音義』等の先行諸書からの孫引きであり、希麟が直接参照した書籍はずっと限定されると考えられる。

希麟が直接参照しえた書籍、特に小學書を知るに当たって次の記述は貴重である。

- (3) 燈炷く下，朱遇反。近代字也。案陸氏『釋文』、『切韻』、許慎『說文』、『玉篇』、『字林』、『古今正字』竝無。唯孫緬『廣韻』收在「注」字内。

〔『希麟音義』卷3「『新大方廣佛花嚴經』卷第四十」(三13)〕

類似の註文は『慧琳音義』にも複数見えるが²²⁾、列挙する字書類の内譯が異なるため、この案語は希麟自身のもものと認められる。従って、少なくともここに列挙された陸徳明『經典釋文』、陸法言『切韻』、許慎『說文解字』、顧野王『玉篇』、呂忱『字林』、張戢『古今正字』(および孫緬『廣韻』)は希麟が直接参照しえたと考えてよい²³⁾。

ただ、彼が目撃しえたこれらのテキストを今日の我々が同じように見ることは最早不可能である。『字林』と『古今正字』は散佚して今に傳わらない。また、『說文』や『玉篇』、『切韻』は、特に唐代以降、後人の手が加わった様々な改編本が行なわれるようになったことが諸書の記述や佚文・斷簡によって知られるが、宋代に敕撰の徐鉉校定『說文解字』(大徐本)、『大廣益會玉篇』(以下、宋本『玉篇』)、『大宋重修廣韻』(宋本『廣韻』)が刊印されるに及んで、それ以前の異本はほとんどが絶えてしまった。それゆえ、上述の諸書は『古今正字』を除いていずれも曾て音註を備えていた小學書であるが、希麟の目撃したテキストは現行本や現存の零細な斷簡・佚文から推知する他なく、それらに由來する音註の特定作業には自ずから限界がある。この點は十分に留意しておく必要がある。

希麟が『慧琳音義』や孫愐『唐韻』系韻書以外に上述書の音註をも利用していたと考えるべき根據は以下のような例から得られる。

22) 例えば、「燈炷く下，音注。……本無此字，譯經者以意書出。唯『集訓切韻』新集入韻。『玉篇』、『說文』、『字林』、『字統』、『古今正字』等無此字。」〔六〇36〕。

23) 他に希麟が〔唐〕張參『五經文字』(776年序。『五經音義』、『五經字樣』とも)も参照したことが以下の案語から知られる：「擯甲く上，胡慣反。……案『說文』、『字林』、『玉篇』皆音胡慣反。唯『五經文字音義』音古患反。……」〔四10〕。因みに、これは『五經文字』卷上「二手部」の「擯く古患反。『釋文』竝音患。」に基づく記述だが、これ自體、『經典釋文』卷10「儀禮音義・士虞禮第十四」の「擯衣く音宣。手發衣曰擯。又作擯，音患，古患反。」に基づく記述であり、『經典釋文』を参照していたはずの希麟が、ここでは同書に当たれていない。「擯」字が見出し語に立たないこともあって見逃したのであろう。

- (4) 𧈧𧈧 〈……下，芳服反。陸氏『釋文』云：𧈧，虵。鼻上有針，大者百餘斤。一名返鼻，一名𧈧虵。……〉

〔『希麟音義』卷6「『佛說穰虞利童女經』一卷」(六06)〕

これに対応する註文は『慧琳音義』には見えず、切韻諸本の反切〈芳福反[切]〉(蔣本・大徐本・宋本)、〈芳伏反〉(切三・王一・王二・王三)とも一致しない²⁴⁾。ところが、この〈芳服反〉は『經典釋文』の音註と一致するのである²⁵⁾。

- (5) 𧈧 〈字亦作「𧈧」。芳服反。又亡六反。此蛇，色如綬，鼻上有針，大者百餘斤。又一名反鼻，鼻一孔。〉 〔『經典釋文』卷30「爾雅音義下・釋魚第十六」〕

もう1つ例を示そう。

- (6) 疥癩 〈上，公薤反。『切韻』：瘡疥也。顧野王云：疥，瘙也。卽風瘙也。……〉 〔『希麟音義』卷6「『佛母大孔雀明王經』卷中」(六04)〕

やはりこれに対応する註文は『慧琳音義』にはなく、在證される切韻諸本の反切も全て〈古拜反[切]〉であって用字が合わない。ところがこの〈公薤反〉は『玉篇』(宋本『玉篇』および『篆隸萬象名義』)と一致するのである(宋本『玉篇』のみ示す)²⁶⁾。

- (7) 疥 〈公薤切。瘙也。〉 〔宋本『玉篇』卷11「疒部第一百四十八」〕

このように、義註に『經典釋文』や『玉篇』を引用した箇所において反切用字もこれらの書に一致する例があることは、希麟がこれらの書の音註をも利用していることの明らかな證左である。

典據不明として残っている28例のうち、(小徐本・大徐本以前の)『說文解字』²⁷⁾、

24) 切韻諸本の反切は上田(1975)に據る。

25) 『經典釋文』は中國國家圖書館藏宋刻宋元遞修本を底本とする。

26) 宋本『玉篇』は澤存堂本を底本とする。

27) 註5に引いた大徐本序にあるように、許慎の時代には反切法が存在せず、『說文』に反切が附されたのは後代のことである。その反切を知る手かかりとしては、唐寫本『說文』殘卷(木部・口部)、『經典釋文』等に引かれる佚文、〔唐〕李陽冰『刊定說文』(佚書)に基づく〔北宋〕郭忠恕『汗簡』・〔北宋〕夢英『篆書目錄偏旁字源碑』(999年建立)等があるが、これらによって知られる說文音は、幾つかの書に引かれる音註がむしろ『玉篇』のそれと一致するのを除けば、佚文から知られる『字林』のそれと一致するという(周祖謨1948)。

『字林』、『玉篇』、『孫愐『唐韻』系統でない)『切韻』、『經典釋文』のいずれかと反切用字が一致するものは以下の11例存在する(三の表中、★で示したものの一部)。

『希麟音義』					典據の候補
#	字	反切	卷丁	註文中の引用書	
037	壹	竹句	十 05	——	説文(汗簡, 字源碑, 五經) ²⁸⁾ 字林(釋文・爾雅釋畜所引) 玉篇(萬象名義, 宋本) 切韻(王二, 王三) 切韻(王一, 王二, 王三) ²⁹⁾ 釋文・爾雅釋詁 ³⁰⁾ 〃 釋文・爾雅釋訓 説文(汗簡, 字源碑) ³¹⁾ 玉篇(萬象名義, 宋本) 切韻(王二, 王三) 玉篇(原本, 萬象名義) ³²⁾ 説文(文選・秋興賦所引) ³³⁾
043	鼻	之句	二 14	——	
074	護	胡故	十 14	字書	
146	簪	囚歲	八 17	爾雅釋草, 郭璞序	
151	掣	昌世	六 15	説文, 爾雅(釋訓)	
152	〃	〃	六 16	——	
162	曳	餘世	六 15	——	
165	𦉳	疋賣	五 10	——	
177	疥	公薤	六 04	切韻, 顧野王	
192	𦉳	古邁	三 09	切韻	
194	話	胡快	八 15	玉篇, 説文, 詩	

また、050「羽」〈王句反〉〔十 04〕(註文中で『説文』を引用)については、『説文』音が〈于句反〉(『字源碑』に據る。『五經文字』も同じ)であり、「王」を「于」の誤寫と看做すならば、説文音と一致する。

さらに、『五經文字』の音註も多くが『説文』『字林』音に一致するという(ibid.)。

28) なお、宋本『玉篇』も〈竹句切〉だが、『萬象名義』は〈竹樹反〉に作る。

29) なお、『經典釋文』卷30「爾雅音義下・釋草第十三」では「簪」〈息遂、囚銳二反〉、卷29「爾雅音義上・爾雅序」では「簪」〈似説反。又囚醉反。一音息遂反〉の音註を付す。

30) なお、『經典釋文』卷29「爾雅音義上・釋訓第三」では「掣」〈本或作「𦉳」, 同。充世反。『説文』云：引而縱之。〉曳〈餘世反。〉とある。

31) なお、宋本『玉篇』も〈匹賣切〉だが、『萬象名義』は〈亡加反〉に作る。

32) 『萬象名義』は〈朝快反〉に誤る。宋本『玉篇』は〈胡卦切〉に作る。

33) 李善註に「『説文』曰：話，會合善言也。胡快切。」とある。ただ、『文選』李善註の引く「説文音」は原本系『玉篇』反切に異なることが指摘されており(周祖謨1948)，その要因が、李善の據った『説文』が『玉篇』から反切を採録していたためか、それとも李善が『説文』からでなく『玉篇』から直接引用したためなのかは定かでない。いずれにせよ、「話」〈胡快反〉は畢竟『玉篇』に由来するとみてよい。なお、大徐本反切も〈胡快切〉であり、これは孫愐『唐韻』に由来するとは考えにくい(切韻諸本すべて〈下快反〉)ので、説文舊音を踏襲したものか、或いは『玉篇』に據ったものであろう。

結局、調査範囲の反切 211 例のうち典拠不明として残ったのは、三の表中、☆で示した僅か 16 例 (7.6%) に過ぎず、ほとんどは『慧琳音義』や孫愐『唐韻』系韻書をはじめ上に挙げた諸書のいずれかと用字が一致する。しかもこれは、当時希麟が参照しえたテキストの多くが散佚して知りえない現状で明らかにしうる数字であり、残りの 16 例と一致する反切用字が、失われたテキストの中に存した可能性は十分にあるのである³⁴⁾。その可能性を考慮するならば、少なくとも以上のごく限られた調査範囲内では『希麟音義』にのみ特有の反切用字はほぼないと言ってよい。

五

以上見てきたように、希麟は自らの語音に基づいて音註を創作したのでなければ、特定の一書に依據して音註を附したのでもなく、複数の時代・地域に跨がる諸典籍から音註を採集しているのである³⁵⁾。ただ、このことは希麟が註音に對して全く無關心で、何らの指針も有たずに参照元の音註をそのまま引用したことを意味するわけではない。

次に挙げる『希麟音義』の註釋は『慧琳音義』からの引用であるのが明白であるが、引用に際して上字の反切が改められている³⁶⁾。

- (8) 罽網〈上，**縛謀反**。鄭注『禮記』云：罽，獸罽也。『韻英』云：罽也。『說文』：兔罽也。從罽不聲也。罽，音古。罽，音姐耶反。下，無倣反。亦作「罽」，正作「罔」也。〉〔『希麟音義』卷 1 「『大乘理趣六波羅蜜多經』卷第三」(一 14)]
- (9) 罽網〈上，**附無反**。鄭注『礼記』云：罽，獸罽也。『韻英』云：罽也。『說文』：兔罽也。從罽不聲也。罽，音古。罽，音濟耶反。下，無倣反。亦作「罔」。〉〔『慧琳音義』卷 41 「『大乘理趣六波羅蜜多經』卷第三」(四一 36)]

34) 例えば、183,184 「械」〈胡戒反〉〔五 06, 八 06〕はその 2 箇所とも『玉篇』を引用しており、その反切についても『玉篇』に依據した可能性があるが、その宋代以前の姿を知る上で重要な『萬象名義』はこの部分を脱しており、未詳である(なお、宋本『玉篇』は〈亥誠切〉)。

35) 卷首の署名に「希麟集」とあるのは、希麟が行なったのがあくまでも編集であって撰述でなかったことをよく物語っている。

36) そのほか、「罽」字の反切用字も〈濟耶反〉から〈姐耶反〉に改められているように見えるが、その理由は定かでない(「濟」は精母齊韻・精母霽韻二音、「姐」は精母馬韻)。或いは、現行本『慧琳音義』の「濟」は「姐」の誤寫・誤刻か。〈姐耶反〉という反切の構成は『慧琳音義』が典型的に採用する反切用字法(河野 1955)に通っている。

この〈縛謀反〉は宋本『廣韻』および完本王韻（王三）の反切と一致しており、希麟は切韻系韻書（孫愐『唐韻』か）に依據して反切を改めたことが推知される³⁷⁾。

唐代關中音（秦音）では尤侯韻（相配する上去聲韻を兼ねる。以下も同様）所屬の唇音聲母字の多くが虞模韻（遇攝）に合流していたため、『慧琳音義』では『切韻』を含む舊來の字書がそれらの字に尤侯韻の音を註するのをしばしば「吳音」「吳楚之音」と呼んで排斥して虞模韻の音で讀むことを是としている³⁸⁾。上記の竝母尤韻字「罽」に對する反切〈附無反〉（「無」は虞韻字）はそれを反映したものである。ところが、希麟は卻ってこれを拒んで傳統的な切韻系韻書の反切を採用しているのである³⁹⁾。

次の例も註文全體は『慧琳音義』の引用であるが、反切は改められている。

- (10) 熊羆〈上，羽弓反。『毛詩』云：惟熊惟羆。『說文』云：獸也。似豕，山居冬蟄，舐足掌。其掌〔似人掌，名曰蹠〕⁴⁰⁾。蹠，音煩。下，音悲。『尙雅』云：羆，如熊，黃白文。郭璞曰：似熊，長頭高脚，猛獾多力，能拔樹木也。〉

〔『希麟音義』卷1「『大乘理趣六波羅蜜多經』卷第一」（一〇七）〕

- (11) 熊羆〈上，許窮反。『毛詩』：惟熊惟羆。『說文』：獸也。似豕，山居冬蟄，舐足掌。其掌似人名掌〔掌，名〕⁴¹⁾曰蹠。蹠，音煩。下羆，音悲。『尙雅』：羆，似熊而黃白色。郭璞曰：似熊而大，頭長脚高，猛獾多力，能拔樹木也。〉

〔『慧琳音義』卷41「『大乘理趣六波羅蜜多經』卷第一」（四一〇九）〕

37) なお、切三・王一は〈薄謀反〉，王二は〈父謀反〉。大徐本『說文』では〈縛牟切〉とあり，その所據する孫愐『唐韻』ではそうであつたらしい。そのほか，『玉篇』は『萬象名義』が〈扶流反〉，宋本『玉篇』が〈縛牟切〉となっている。

38) 例えば，「浮囊〈附無反。『玉篇』音扶尤反，陸法言音薄謀反。下二，皆吳楚之音也。今竝不取。〉」〔〇七三二〕。ただし，こうした註記は一貫しておらず，『慧琳音義』には一方で舊來の音切をそのまま用いた箇所も混在している（上田1983）。

39) 希麟の現實の音韻體系において「罽」字がどう讀まれたかは定かでない。遼代石刻文中の韻文では輕唇音尤韻去聲字「副」「富」が尤侯韻上去聲字「邁」「授」「宥」「獸」「寶」「冑」「有」「穀」「陋」「秀」「後」「廐」「晝」「壽」「岫」「朽」と押韻した例（『蕭德溫墓誌銘』1075年撰）があるが，契丹文字資料では「副」「富」は *puu*（または *fiuu*）と表記されるように遇攝に合流している。他の音韻特徴に關しても文語的色彩の強い墓誌銘等の韻文資料と口語的色彩の強い對音資料とでは相違が見られるため，遼代には複數層の漢語音が存在したと推定されるが，この場合に「副」「富」が尤侯韻字と押韻するのは，輕唇音尤韻音節が遼代の讀書音では流攝に留まっていたためという説明だけでなく，現實の語音を無視して傳統的な韻書の枠組みに従って押韻されたためという説明も可能であろう。それゆえ，「罽」字の反切を〈附無反〉から〈縛謀反〉に改めたことによって遼代音に適う音註となっているのか否かは決しがたい。

40) 原文では脱字があると考えられるため，『慧琳音義』の對應箇所に基づき補う。

41) 原文では「掌」と「名」を轉倒しているが，文意および同文を引く『慧琳音義』の他箇所〔七〇二六ほか〕により改める。

『希麟音義』の〈羽弓反〉は宋本『廣韻』および大徐本『説文』の反切に一致しており、やはり孫愐『唐韻』系韻書の反切を採用したものと推定される⁴²⁾。

東韻拗音の「熊」「雄」2字は切韻系韻書の音韻體系では于母であり、一般に于母に對應する現代官話方言の聲母はゼロ聲母であるが、「熊」「雄」2字に限っては例外的に（匣母や曉母に對應するところの） ɣ- (< *x-) が對應する。これに呼應して『慧琳音義』も「熊」には〈畫窮反〉〔一一 09〕のように匣母字や、上記の〈許窮反〉のように曉母字の反切上字を用いているが⁴³⁾、希麟はこれを採用せず、わざわざ切韻系韻書に據って于母字を上字とする〈羽弓反〉に改めているのである⁴⁴⁾。

ここに、希麟の注音の基本姿勢を見ることができると。すなわち、切韻系韻書である孫愐『唐韻』とそれ以外の諸書とで音註に食い違いがある場合には、前者を優先させるという「切韻至上主義」とも言うべき姿勢である。このように希麟は引用する音註に對して一定の注意を拂って手を加えてはいるが、その目的は音註を現實にではなく規範に合わせるためであったとみるべきであろう。

六

以上検討してきたように、（調査範囲から敷衍する限り）『希麟音義』音註のほとんどは希麟が参照しえた諸典籍の現行テキストや佚文・斷簡の中に用字の一致する音註を見出すことができる。このことから、『希麟音義』音註は先行する諸典籍、とりわけ『切韻』の流れを汲む孫愐『唐韻』系統の韻書と『慧琳音義』の兩書を参照して附されたもので、希麟自身が新作したものではないと推定される。もっとも、反切を新作せず先行書のそれを用いたとしても、當代の音韻に適合するもののみを選択的に採用すれば、その反切は當代の音韻を反映することになるので、反切の襲用は即ち當代の音韻資料としての資格喪失を意味するわけではない。しかしながら、『希麟音義』の場合は、そうした方向で反切の選擇を行なっているようにはどうも見えない⁴⁵⁾。むしろ、

42) なお、切二・王二・王三は〈羽隆反〉。『玉篇』では『萬象名義』が〈胡公反〉（〈胡宮反〉の誤か）、宋本『玉篇』が〈于弓切〉である。

43) また「熊」に對して「音雄」とも記すので、「雄」も「熊」と同音であったことが分かる。

44) 契丹文字資料では「雄」を *kiwng^w* と表記しており、遼代音（口語音？）ではゼロ聲母ではなく舌背音聲母を有したことが分かる（契丹語資料では漢語の舌背摩擦音 *x-*（曉匣母）も有氣舌背破裂音 *k-*（溪母と平聲群母）も拗音音節では區別なく契丹語 *k-* として受容される）。ただし、讀書音ではゼロ聲母であったという可能性も否定できないから、〈羽弓反〉が遼代音に即した音註になっていないとは言い切れない。

45) これは遼代の讀書音がどのようなものであったかが明らかでない以上確實なことが言えないのだが、例えば反切上字として重唇音と輕唇音を區別しないことなど、古風な特徴を示す反切までも切韻系韻書のものを襲用している（例えば「弼」〈房密反〉〔二 15〕：蔣本・

希麟が尊重するのは伝統的な切韻音（ただしそれは孫愐『唐韻』系統のもの）である。以上の点から、『希麟音義』音註の遼代漢語音研究における資料価値は極めて限定的であると結論づけなければならない⁴⁶⁾。

参考文献

- 神尾弼春（1937）『契丹佛教文化史考』大連：滿洲文化協會（東京：第一書房，1982年復刻）。
- 河野六郎（1955）「慧琳衆經音義の反切の特色」『中國文化研究會會報』5(1)（『河野六郎著作集』第2卷，261-266，東京：平凡社，1979年）。
- 河野六郎（1979）『資料音韻表』河野六郎著作集 第2卷 別冊，東京：平凡社。
- 切通しのぶ（2004）「『續一切經音義』における希麟音切の考察」『九州中國學會報』42: 1-15.
- 中村雅之（1991）「孫愐『唐韻』について」『富山大學人文學部紀要』17: 151-168.
- 聶鴻音（2001）「黑城所出《續一切經音義》殘片考」『北方文物』2001(1): 95-96.
- 坂井健一（1955）「希麟《續一切經音義》反切攷——陽韻尾類について——」『中國文化研究會會報』5(1)（『中國語學研究』376-394，東京：汲古書院，1995年）。
- 高田時雄（2010）「藏經音義の敦煌吐魯番本と高麗藏」『敦煌寫本研究年報』4: 1-13.
- 上田正（1956）「東宮切韻論考」『國語學』24: 79-94.
- 上田正〔編〕（1973）『切韻殘卷諸本補正』東洋學文獻センター叢刊第19輯，東京：東京大學東洋文化研究所附屬東洋學文獻センター刊行委員會。
- 上田正（1975）『切韻諸本反切總覽』京都：均社。
- 上田正（1983）「慧琳音論考」『日本中國學會報』35: 167-176.
- 上田正（1986）『希麟反切總覽』神戸（私家版）。

大徐本・宋本同）ことからこのように臆測される。

- 46) 本文で論じてきたように『希麟音義』音註に系統的に遼代音が反映していることは望めないが、個別事例において遼代音の手がかりを得られる可能性はある。例えば、『希麟音義』「鳳凰」項〔一〇八〕は『慧琳音義』「鳳凰」項〔四一〇〕の上字に対する反切〈馮諷反〉を〈馮貢反〉に改めているが、この反切は切韻諸本（王一・王二・王三・大徐本・宋本）と一致するから、切韻系韻書に依據して改めたことが推定される。「鳳」と「諷」は東韻拗音、「貢」は東韻直音であるが、輕唇音音節では拗介音の脱落により直音化が生じたから、一見すると「諷」と「貢」は同韻字となっていて〈馮諷反〉から〈馮貢反〉への書き換えは何の變化も及ぼさないように思われる。しかし、例えば朝鮮漢字音では「諷」*puŋ*に對して「貢」*gon*、「鳳」*bon*であり（河野（1979）に據り、訓民正音は翻字して示す）、「諷」は「貢」とも「鳳」とも韻を異にする。希麟がわざわざ書き換えを行なっていることから、遼代音でも「諷」と「貢」は同韻でなかった可能性が考えられよう（「鳳」と「貢」が同韻であったとまでは言えないが）。

王國維（1923）「書吳縣蔣氏藏唐寫本唐韻後」『觀堂集林』卷第八，10-14，烏程：密韻樓。

王國維（1927）「書式古堂書畫彙考所錄唐韻後」『觀堂集林』增訂再版，卷第八，9-10（『海甯王忠愍公遺書』初集）。

徐朝東（2012）『蔣藏本《唐韻》研究』北京：北京大學出版社。

徐時儀（2002）「《希麟音義》引《廣韻》考」『文獻』2002(1): 24-35.

周祖謨（1948）「唐本說文與說文舊音」『中央研究院歷史語言研究所集刊』20(上): 107-130（『問學集』下冊，723-759，北京：中華書局，1966年）。

※本稿は JSPS 科研費（特別研究員奨励費 17J04094）の助成を受けた研究成果の一部である。